

窪畑ファームは、母体の山本組が、昨年たちあげた新しい農場である。山本組は公共事業や道路など地元のインフラ整備を中心に事業を展開する建設業で、農業参入は初めての試みだった。にもかかわらず、建設業という異業種が農業参入したことや、農薬を一切使わない農法、ITで管理する新しい農業のスタイルということが、新聞紙上に取り上げられ、多くの方に注目頂いている。

地方では経済の低迷が続き、これが単に景気循環によるものであればよいが、これから本格的な人口減少社会を迎え、地方もわれわれ建設業にとっても構造改革の転換点にある。そのため、これまでと同じような方法で事業を展開していくことは難しく、そのための打開策を打ち出さねばと考えていた。同業者の中には業態を縮小する企業、集約化する企業なども増えているが、事業縮小だけでなく新たなビジネスのチャンスをつかまなくては、企業だけでなく、地域が活性化はしないだろうと考えていた。

先代の社長が庄内の砂丘地に保有していた土地があり、この土地を活用するため農業に進出する案も、ずっと頭の片隅にあった。また、建設業の農業への参入については、県内ではすでに最上地域の大場組や柴田組などが取り組みを進めており注目していた。しかし、私は農業に関しては全くの素人。もちろん、社員は建設業のプロであっても、農業のプロはいない。どうしたら農業への参入を図ることが出来るのかを考えあぐねていた。

そんな時、働き手だった家族を亡くして人手不足になったため、農家を辞めようとしていた男性と出会った。その男性に「もう一度、農業をやらないか」と声をかけた。そして彼は今、事業部次長として、窪畑ファーム運営の中心を担っている。それから毎週日曜2人で、「どんな事業にするか」、「何を植えるか」、「どのように事業を進めていくか」など情報収集し、準備を進めた。たまたま目にした新聞記事に、2006年に設立したばかりのベンチャー企業「アニス株式会社」の記事が掲載されていた。その内容に興味を沸き、「直接話を聞いてみよう」と、翌日スタッフと一緒に本社に向かった。

突然の訪問にもかかわらず、アニス株式会社の純浦社長は、アニス農法について詳しく説明をしてくださった。純浦社長はもともと、マイクロソフト社に勤務していたが、その後農業に転身し研究を重ねてアニス農法を開発した。アニス農法とは、化学合

成肥料を一切使わず、有機肥料と微生物をつかった特殊な土を使っている。また、ITの技術を生かして、ハウス内の温度や水の管理をITで行うことで、効率的な農場管理を行っている最先端の農法である。

アニス農法で栽培した作物は、害虫が全く寄りつかず、害虫駆除の農薬を一切使用する必要がない。農薬を一切使わない作物を作ることで、収穫された農作物は人間にとって安心・安全であるだけでなく、アミノ酸のうま味が凝縮されている。さらに、農場の管理をすべてコンピューターで管理し、水の管理

バリューサイト
VALUE SIGHT

バイオIT農法でトマ 農業で地域活性化を 建設業の新たなチャ

少子高齢化、景気の低迷、原材料価格高騰で、地方は疲弊の色が濃く、将来への明るい兆しや期待が持てずにいる。そんな時だからこそ、「新しい農業で地域を元気にしたい」と、無農薬でIT（情報技術）をつかった農業に取り組みはじめた、建設会社がある。

やハウスの温度や湿度の調整はすべてITで管理することによって、農業経験が乏しい人でも効率的な作業を行うことが出来る。

農薬を使わない安心・安全な食品の提供や、世界規模で懸念されている将来の食糧危機に対して、アニス農法は化学合成肥料を一切使わず、有機肥料と微生物をつかった特殊な土を使う農法であるため大きく貢献できると語る、純浦社長の農業への思いに、私は感銘を受けた。また、農業という分野がこれから大きな産業に成長することを確信し、山形に戻ってきた。

その後まもなく、窪畑ファームはアニス株式会社と提携し、アニス農法で農業へ参入することを決めた。農業への参入を決めてから、約3ヶ月というスピードで準備が整った。土地の一角にプレハブの事

務所を建設し、いよいよ窪畑ファームがスタートした。ビニールハウスを8棟建設し、今年3月にはトマトの苗を植え始め、今では美味しいトマトが実り、本格的に出荷が始まっている。

現在は、湯野浜入り口にオープンしたアンテナショップで販売しているほか、インターネット注文で、全国各地に発送している。また、東京・中目黒にある日本初のオーガニック野菜スイーツ専門店『ポタジエ』の柿沢シェフが窪畑ファームのトマトを気に入ってくださったことで、東京でも窪畑のトマ



アニス農法で栽培したトマト

とを学んだ。また、農業への参入によって農業がどれだけ私たちの暮らしに重要であるかを実感している。なかでも「食の安心・安全」を守るために農業の役割が大きいこと、特に将来を担う子供たちには、旬の食物を食べてその美味しさを知ってほしい。そのために、今後は「食育」に関する取り組みも出来ないかと検討している。

日本で農業が立ち行かなくなってしまうと、これからの世界的な食糧難の時代に対応できなくなる。そのためにも、自国で農作物を確保できることは重要になる。その点から、アニス農法は土や水の少ない砂漠地域などでも作物の栽培が可能であるため、このアニス農法に取り組むネットワークを広げて、実績を積んでいくことが必要だろう。

このように、農業は大きな力を秘めている。そして農業で地域を活性化できる。それは、異業種からの参入によって、新たな農業の担い手づくりができるからだ。また、庄内で生産された農作物のブランドが全国に広まることでも、地域が活性化される。農業も、1つの地域のインフラ作りといえるだろう。地域の活性化、元気のために今後も果敢に取り組んでいきたい。

ト栽培 めざす レンジ

庄内



窪畑ファーム
代表

山本 斉

トのファンを増やす、大きなきっかけとなった。

今後、多くの方々に窪畑のトマトを食べていただくため、ケチャップやトマトソースなど加工用のトマトにも広げることや、販売ルートを広げていくことが課題である。そのために、加工製品をどのように作っていくのか、どのように販売網を広げていくのか、またどのように広告戦略していくかという課題は、これまでの建設業では経験したことのない「マーケティング」への新しいチャレンジでもある。

これまで建設業一筋で、農業はゼロからのスタートだった。ここまで約1年間という短い期間で事業を立ち上げてきたのも、純浦社長や柿沢シェフなど、人との出会いとつながりによるところが大きく、これまで交流のなかった、異業種の人々との関わりを通じて、新しいビジネスチャンスが生まれてくるこ

■ 山本 斉 (やまもと・ひとし)

窪畑ファーム 代表。
株式会社山本組 代表取締役。
1958年生まれ。2003年から株式会社山本組代表取締役。
2007年9月に窪畑ファームオープン。
株式会社山本組（窪畑ファーム）
〒997-1117 山形県鶴岡市下川字窪畑105-1
TEL 0235-75-2334・FAX 0235-75-2316
<http://www.kubohata-farm.com/>